

【新連載】

日中学術交流の現場から 第1回

# ゴジラの来る前夜に —ゴジラと市民科学—

山口 直樹 (北京日本人学術交流会責任者)

## はじめに

私が、中国の北京を拠点に研究を行うようになってからかなりの時間がたつ。その間、日本では、たとえば『前夜』という雑誌が高橋哲哉氏や徐京植氏らが主導して創刊されたりしていた。この雑誌を読みながら私は、この戦争前夜、ファシズム前夜という状況に「あれ」を登場させる必要があるのではないかと感じ続けていた。

「あれ」とは、日本の高度経済成長とともに我々の前にあらわれ、人類の都市文明を破壊しつづけている怪獣ゴジラのことである。

しかし、なぜ、ゴジラなのだろうか。この問いに一般的に答えることはなかなか難しい。

ただ、なぜ「自分は、ゴジラに惹かれてしまうのか」という問いには、「ゴジラが日本の支配的な社会秩序に対する嫌悪であり続けているから。」とまずは、答えておきたい。

## 1. 現代中国で知られていないゴジラ

私が、ゴジラのことを考えるようになったのは、北京に拠点を移すよりずっと以前の1990年代半ば、『ゴジラ』(1954)をレンタルビデオ屋で借りて見たとき以降のことだった。

『ウルトラマン』(1966)や『ウルトラセブン』(1967)『仮面ライダー』(1971)など日本の

特撮作品で育ってきた私だが、『ゴジラ』(1954)は、私が想像していたのとはまるで違う映画であった。そこには、思いもよらない深い哲学が、存在しており、立ち止まって考えざるを得ないものがあるということを強く意識した。「ここには何か重要なものがある」という直観が私には、あった。



夜、品川に上陸するゴジラ

日本においては、ゴジラの知名度は圧倒的である。子供からお年寄りまでゴジラを知らないという人を探すのは難しいであろう。そして、その知名度は世界的なものである。ところが、中国大陸においてだけは、例外的にゴジラは知られていないのである。

たとえば、日本の鉄腕アトムは、現代中国でも高い知名度を誇っている。

改革開放以降に中国では、本格的なテレビ放送がはじまるが、そのとき最初に放送されたアニメが鉄腕アトムだったので、中国において特に高い知名度があるのである。

また、ウルトラマンをはじめとしたウルトラシリーズは、中国では1990年代からテレビ放送が始まり、『奥特曼』として高い知名度を獲得していく。ところが、ウルトラマンよりも古いゴジラは、中国において紹介がなされないままだったのである。

私が、そのことを知るのは、2005年に北京大学の日本語学科の学生たちを対象に日本文化紹介の一環として行ったゴジラに関する授業を行ったときであった。

多くの北京大学生は、ゴジラのことを全く知らなかったのである。

それが、北京の青年たちに私が、ゴジラに関する出前授業を行うという“北京ゴジラ行脚”

につながっていくことになる。

その結果、わかってきたのは、ゴジラをはじめとした東宝の怪獣映画そのものが、一般の中国人には、ほとんど知られておらず、人気も低い状態にあるということだった。

(中国共産の幹部クラスの人物を父にもつ中国人からもたらされた情報によるならば、中国共産党の幹部とその家族限定で『空の怪獣ラドン』の上映会がなされていたことがあるという。だが、中国の一般の人たちには、まだまだその存在すら認識されていない。)

その後、ハリウッドのゴジラが、中国でも公開され、ゴジラの知名度は、上がったといえるが、ゴジラを日本ではなくアメリカのものだと考えている中国人も少なくない。

私が、北京で“北京ゴジラ行脚”を行うきっかけになった背景には、中国人がゴジラと同時に第五福竜丸のことをまるで知らないという状況があった。

2004年、私は、占領史家の笹本征男氏から第五福竜丸の元乗組員、大石又七氏を紹介されていた。私の“北京ゴジラ行脚”には、中国人にもっと大石又七氏のことを知ってもらいたいという思いがあったことは確かである。



大石又七氏とともに（筆者）

## 2. 現代中国で忘却された第五福竜丸

ゴジラが、誕生するきっかけとなった日本のマグロ漁船、第五福竜丸は、アメリカのビキニ環礁における水爆実験により1954年3月1日に被曝する。これは世界的なニュースとなって各国で報道されることになった。

日本においては、杉並区の主婦を中心に3000万人もの水爆実験反対署名が、集まることになる。当時の外務大臣だった岡崎勝男は、第五福竜丸がアメリカの水爆実験で被曝していたにもかかわらず、「私たちはアメリカの水爆実験に協力する。」と発言し、多くの日本人の反発を招いていた。東西冷戦の緊張の中でなされた異様ともいえる発言だが、このとき日本の反アメリカの世論は、最高潮に達しつつあった。

その反アメリカの世論を鎮めたのが、読売新聞や日本テレビが、行った「原子力の平和利用」キャンペーンであることは、よく知られていることだが、正力松太郎は、被曝した第五福竜丸をもデパートの伊勢丹に飾り、「原子力の平和利用」の一環として利用していた。

一方、そのころ中国では周恩来が、第五福竜丸に関して「アメリカ帝国主義が、アジアの人民を被曝させた。」と述べ、日本の反米の世論と連帯するように多くの中国人に働きかけていたのだった。その時点では、第五福竜丸は、多くの中国人に認識されていた。

ところが、その後、第五福竜丸は、中国社会から完全に忘却されてしまうことになる。

2013年5月25日、私が、主催する北京日本人学術交流会では、第89回北京日本人学術交流会を第12回「放射能と原子力を考える日中サイエンスカフェ」として新藤兼人監督の映画『第五福竜丸』(1959)の上映会を行っていた。そのとき『現代思想』の元編集長、池上善彦氏に「50年代核はどのように描かれてきたか」という報告を行ってもらったり、中国社会科学院日本研究所の胡膨氏や『人民中国』の編集長である王衆一氏にコメントをもらったりした。そのとき、中国メディア大学で公共外交研究を行う趙新利氏からもコメントをもらったが、そのコメントとは「私は日本のことを研究していますが、実は、第五福竜丸のことを全く知りませんでした。」という率直な告白コメントであった。

つまり研究者レベルの中国人ですらほとんど、第五福竜丸を認識しておらず、中国社会から第五福竜丸の記憶が、ほぼ完全に忘却されていることがうかがえたのである。

その後、私は、中国国際放送でゴジラについて語ることになるが、その時、周恩来が、第五福竜丸の被曝を「アメリカ帝国主義が、アジアの人民を被曝させた。」という言葉で批判していたことを私が述べた部分は、放送時にはカットされていた。

### 3. 日米関係とともに日中関係のなかでゴジラを考えるとということ

これまでゴジラは、圧倒的にアメリカとの関係のなかで論じられてきたといってよい。

これは、ゴジラ誕生のきっかけとなる日本のマグロ漁船、第五福竜丸が、アメリカの水爆実験によって被曝しているのだから当然といえば当然である。

もっとも、アメリカにおいてもゴジラ誕生のきっかけとなる第五福竜丸の被曝のことは、ごく一部のアメリカ人しか知らなかった。

アメリカで普及しているゴジラ映画においては、日本のマグロ漁船が被曝したと思われるシーンはカットされており、ゴジラがなぜ生まれたのかについては、不問にされB級娯楽映画として消費されている。

そのことによってかえってゴジラの不気味さが、増していることは、皮肉なことだといわなければならない。オリジナルの日本の『ゴジラ』(1954)が、アメリカでようやく公開されたのは、50年後の2004年においてである。ちなみに英語では、第五福竜丸のことは、lucky dragon と表記する。

一方、ゴジラが、現代中国で知られていないことは、前述したとおりだが、ゴジラは、中

国との関係のなかにおいても考える必要のある怪獣である。

なぜかというとなぜ決定的に重要なのが、『ゴジラ』(1954)の監督、本多猪四郎氏が、三度にわたって合計8年もの間、中国大陸に日本兵士として動員されていたということがあげられるだろう。

このため本多猪四郎氏の監督デビューは、大きく遅れるのだが、この戦争経験が、『ゴジラ』(1954)を奥深いものになっている。

また『ゴジラ』(1954)に出演した俳優、宝田明氏は、「満州国」の国際都市ハルピンで育ちそこから大変な思いをして日本に引き揚げてきた人であった。

『『ゴジラ』(1954)は、怪獣映画であるとともに戦争映画である。』とは、これまでも多くなされてきた指摘であるが、その場合の戦争とは、日米の戦争であるとともに日中の戦争であり複合的な性格を持つということは、見逃されてはならない。



宝田明氏とともに（筆者）

おそらくは主に地政学的な理由から、ゴジラ映画には中国は、ほとんど出てこず、怪獣たちは、太平洋側から日本にあらわれるというゴジラ映画の基本文法が形成された。

しかし、日本における怪獣文学の担い手だった武田泰淳(「ゴジラが来る夜」の作者)や堀田善衛(「モスラ」の原作者)が中国に深くかかわった人たちだったことは、単なる偶然ではないだろう。(このところ日本におけるゴジラ研究は大きな前進をしめしている。ただ、中国語でゴジラは、哥斯拉と表記するのだが、そのことに触れている日本語文献は、私の見るところでは、ましこひでのり『ゴジラ論ノートー怪獣論の知識社会学』(三元社,2015)ぐらいである。)

我々は、絶えずゴジラの原点『ゴジラ』(1954)に立ち返ってそのようなことを考えてみなくてはならない。

#### 4. ゴジラの来る夜とは

『ゴジラ』(1954)でゴジラが、最初に登場するのは、夜であった。東京の南方、小笠原諸島のなかの一つの島と思われる大戸島で民家が何者かによって押しつぶされる。それはどう考えても巨大生物としか思えないもので、まだ依然として正体がわからず、見ているものの不安はじわじわとかき立てられる。

ゴジラが、はじめて東京にあらわれた時もまた夜であった。船上でダンスに興じていた男女が、海中から姿を現したゴジラに気が付き船上は、パニック状態となる。

そして、東京周辺の海岸上で待ち受けていたのは、その年、1954年に警察予備隊から昇格した自衛隊であった。自衛隊は、高電圧の鉄条網でゴジラの東京侵入を阻止しようとするが、いともたやすくゴジラに破られてしまう。

そして砲弾によるゴジラの攻撃を行うが、水爆実験によって被曝しても死ななかったゴジラをそうした兵器で倒せるはずもなかった。

あの戦争から立ち直り、ようやく復興が行われ、人々は守るべきものを持ちはじめていた。

サンフランシスコ講和条約によってアメリカから独立してから二年が経過していたが、その当時の人々は、自衛隊を「戦力なき軍隊」と揶揄する精神をもっていた。

敗戦のはじまりにおいてアジア太平洋戦争で敗北した日本は、それまでの非民主的であった政治思想や国家思想の反省を迫られた。だから社会思想やイデオロギーが問題になる

文系においては、戦時中の戦争協力があるなら発言をはばかれるという状況があった。

しかし、自然科学の分野においては、科学技術は戦争に必要ということで科学動員が語られ、研究者には様々な優遇措置が与えられ科学者もそれにこたえていたが、敗戦直後にそれへの反省は語られることはなかった。大部分の科学者は、被害者の立場から「科学戦の敗北」を語っていた。そして深刻な反省もなく科学立国による「科学日本の再建」が語られていくのであり科学者だけは責任を問われることもなく戦時から平時にかけて無傷で生き残ることができたのである。日本においてはアメリカによる原爆投下すら日本ファシズムに対するアメリカのデモクラシーの勝利として語られていた。

また、1946年には、マルクス主義者を中心とした民主主義科学者協会という民主化運動の組織が設立された。ここからは当時、科学的＝民主的ととらえられていたことがうかがえる。科学者は進歩的で民主的であるが、政治家や官僚は、科学に無知で近視眼的であり、反動的だという図式が、存在していた。

しかし、戦後20年を経た1960年代中期、官民をあげた科学技術振興計画が進行し、科学技術の研究はその体制に組み込まれていたもので、状況は大きく変化しようとしていた。

一方、戦後の冷戦の始まりとともに日本では占領軍の方針が、変化し、経済政策において「非軍事化」から「復興」へと転換した、そして1955年、56年には神武景気を迎える。

これは、朝鮮戦争による米軍発注による特需や国際情勢の変化による輸出の増加によるものであった。1950年に始まり3年間続いた朝鮮戦争は、日本の植民地支配の後遺症でも

あるが、その戦争で戦後の日本資本主義は、復活のきっかけをつかむことになる。

また、このころ戦前に日本の権力の中核にいた者たちが、急速に日本社会において復帰しつつあった。

そしてヒロシマ、ナガサキについて日本にとっての三度目の被曝経験となるマグロ漁船、第五福竜丸が、ビキニ環礁で被曝した1954年は、国会で原子力予算が計上され、「原子力の平和利用」の研究がうごきはじめていた。

そして、60年代においては理工系ブーム(このブームを作りだしたのは、政財界の支配層であった)といわれる流れの中で科学研究は、急速に資本のコントロールの下にはいつつあった。

科学史家の広重徹は、1960年の時点においてにおいて「いま日本の科学はたいへんな勢いで独占資本主義体制の中に組み込まれつつある。大学においても、いろいろな形で産業界から流れ込んでくる資金や、科学技術会議の策定する重点研究(それは産業界の要求を反映しているとみてよい)に関連するものに集中的に科研費を出すというような政策によって、研究者の自主性が失われ、科学研究というものの自律性がそこなわれ科学研究が体制側のコントロールのもとに急速に入ろうとしている。しかも当の科学者はそのような事態の進行の意味をほとんど自覚的には認識していない。』『戦後日本の科学運動』(中央公論社1960)(5頁)と述べていた。

1955年に日本生産性本部が1956年には、原子力推進を目的とする科学技術庁が、動き始めている。そして1960年には、大学に原子力工学科が創設されている。

実際には資本の側が、合理的な科学研究を欲するように状況は変化していたのである。こうして人々の信じる明るく合理的な未来にゴジラの来る夜が、闇が、準備されていたのである。

高度経済成長が始まろうとしていたこの当時、忌まわしい戦争の記憶を忘却し、復興による輝かしい未来を志向する時間意識が、人々をとらえつつあった。投げ捨てるべき忌まわしい過去と復興と高度経済成長による輝かしい未来というように時間に価値の序列が生じていた。それは、近代化の時間、進歩の時間意識であった。この当時の人々の進歩の時間意識こそが、もっとも忌まわしく、投げ捨てたい過去としてゴジラに太古の恐竜というスタイルをとらせたのであった。

そして21世紀初頭の今日において科学者が再び戦争に動員されかねない戦争前夜というような状況が生まれている。

ゴジラの来る夜の闇は、ますます深まっているのである。

## 5. 科学者の思想と倫理を問う物語としての『ゴジラ』(1954)

市民科学研究所の前身である「科学と社会を考える土曜講座」において上田昌文氏は、本

多猪四郎監督の映像作品を鑑賞して共同討議を行うという企画を行っていたと記憶する(※)。

※ [編集部注] 1995年にメンバー4人から成る、特撮映画、アニメーション、漫画のなかで「科学」がどう扱われているかを調べ、事例報告し、それをふまえて、作品を鑑賞するプロジェクトチーム(「MASCプロジェクトチーム」)が結成された。その発表会の一つが96年2月に行った「漫画・アニメと科学の交差点」であり、また、このプロジェクト関連して公表された文章の一つが『遊星より愛をこめて ～幻の「第12話」をもとめて』[https://www.shiminkagaku.org/post\\_260/](https://www.shiminkagaku.org/post_260/) (牧史郎・著、『どうよう便り』第35号特別号2000年7月)である。

これは、いまから考えるならば先駆的な意味を持った試みであったと評することができるだろう。空想科学映画と呼ばれる映画や怪獣映画はたくさんあるが、本多作品にしかみられない大きな特徴が存在する。通常の怪獣映画では、怪獣と人間社会との間で物語が展開していく。ところが本多作品においては、怪獣と人間社会以外に科学者が登場し、必ずと言っていいほど重要な役割を演じているのだ。

私が、注目したいのは、『ゴジラ』(1954)は、科学者による最終兵器オキシジェン・デストロイヤーの使用についての倫理をめぐる非常に思想性の高い物語になってしまったという点である。『ゴジラ』(1954)とは、科学者論を見ているものに思考させる物語でもあったのだ。

『ゴジラ』(1954)の第一作において酸素をあらゆる角度から研究していた化学者、芹沢大助博士が、ゴジラを倒すために彼の発明した水爆以上の破壊力をもつというオキシジェン・デストロイヤーの使用を懇願されたとき、あくまで平和利用のために研究してきたのだといい、頑として拒み続ける。そのときの尾形の「たった一度だけ使用してあとはすべての研究資料を焼き払ってしまえばいい」という主張に芹沢博士はこう答える。

「尾形、人間とは弱いものだよ。一切の書類を焼いたとしても俺の頭の中には残っている。俺が死なない限りどんなことでふたたび使用する立場に追い込まれないと誰が断言できる。」

私には、芹沢博士のこの言葉は、「人間の弱さ」というものを科学者の立場から見事に表現しきった言葉のように思われた。彼(香山滋の原作では元北京大学の教授という設定になっている)は、なんらかの理由で戦争において傷を負い、いいなづけの山根恵美子を戦後日本を象徴する明朗な青年、尾形にうばわれていくのをなんのすべもなく見守るしかない男である。

芹沢博士は最先端の科学者でありながら、現代科学に不信を抱き、みずからをふくめて人間というものを信用していないいわば闇の科学者である。この芹沢博士の背負う闇はゴジラの闇とほぼ同質の闇である。ゴジラを葬り去ったのが、当時華々しく登場した「防衛隊」のち自衛隊ではなく、このゴジラと同じ闇を背負う芹沢博士であったことは、非常に意味深いことであった。

たとえば、このことに関して『ゴジラとヤマトと僕らの民主主義』などの評論で知られる

評論家の佐藤健志は、次のように述べている。「自衛隊ではゴジラに対抗できないことが分かっており、かつゴジラが今後も来襲する危険があることまでわかっているにもかかわらず、当面ゴジラを撃退した後では、登場人物は誰ひとりとして将来のゴジラ対策（たとえば日本の核武装など）をまともに考えようとししないのだ。それどころか、ゴジラを撃退しうる唯一の兵器オキシジェン・デストロイヤーの開発者、芹沢博士は、現にゴジラが東京を襲撃しているときに「今、これを使用すれば軍事利用の恐れがある。」（絶句）としてデストロイヤーの使用を拒否するのである。どうも彼にとっては、自分の研究が悪用されなければ日本が滅んでもかまわないらしいのだ。」『ゴジラとヤマトと僕らの民主主義』（文芸春秋,1992）（94頁）

さらに「またゴジラの発見者であり、芹沢とも親しい生物学者・山根博士にいたっては「あのゴジラが最後の一匹とは思えない。」などといっておきながらようやくデストロイヤーの使用を決意した芹沢が、一度使った後は二度と作れないようにと研究成果を焼却することをとめようとししないのだ。なんたる無責任な態度であろう。」（95頁）と批判している。だが、はたしてそうなのか。

ここで佐藤健志は、あまりに戦後民主主義を揶揄したいがために基本的な事実を捻じ曲げている。

オキシジェン・デストロイヤーが、使用される前にその秘密を知っているのは芹沢博士が「絶対の秘密」として打ち明けた山根恵美子（河内桃子）、および山根恵美子が「約束を破ります」と話した尾形（宝田明）の3名のみである。

オキシジェン・デストロイヤーの秘密（存在）が明かされ、研究成果を焼却するのは、尾形と芹沢博士がもみ合いテレビから乙女たちの「平和への祈り」の歌が流れてくるときである。

ここには山根博士は一切、登場しない。つまり山根博士の知らない間にオキシジェン・デストロイヤーの存在が明かされ焼却されていたのである。

佐藤は、「芹沢が、一度使った後は二度と作れないようにと研究成果を焼却することをとめようとししないのだ。なんたる無責任な態度であろう。」というが、山根博士は、その時そうしたことは全く知らず、止めようにも止めようがないのである。

にもかかわらず、戦後民主主義を揶揄したいがために強引な解釈を行い破綻している例が、この佐藤のゴジラ評論であろう。

原作者の香山滋は、「この作品を構成するに当たって、故意に程度を低くしたり、俗受けを狙ったりするような態度に出ませんでした。それどころか、ぼくはぼくなりになり原子兵器に対するレジスタンスを精一杯に投げつけてみようとしてそれに重点を置きました。形式は映画のための筋書きですが、その芯となる意図は、作中の化学者、芹沢大助なる人物によって充分代弁させてであると信じます。（後略）」（1954年10月、「ゴジラ刊行に就て」より）とも述べている。

## 6. 戦後民主主義の啓蒙主義的科学観と『ゴジラ』(1954)における芹澤大助の科学観

佐藤健志は、『ゴジラ』(1954)を戦後民主主義の世界観で描かれた作品であるとし、その破綻を揶揄してみせる。だが、たとえば『ゴジラ』(1954)に登場する科学者、芹澤大助の科学観は、戦後民主主義の科学観とは大きく異なっている。

日本は「科学戦に敗れた。」のであるからさらなる科学振興が必要であると考え科学技術の振興や開発にだけは、原子爆弾の開発も含めて疑問が出されることはなかった。

科学技術については、政治的な立場を問わず、階級的な位置も問わず、その進歩について異を唱える者は、誰一人いないという状況が、戦後啓蒙期といわれる時代に生まれていた。

戦後民主主義の科学観とは、自然科学の研究を絶対的な善とみて「なにをおいても科学研究は大切」と唱える没論理的な科学研究至上主義からはじまり自然科学の進歩と社会の進歩と同一視するそのような科学観であり、科学性善説とでもいえるものであった。

しかし、たとえば、山本義隆は「ランダウをめぐる」『物理学者ランダウ・スターリン体制への反逆』(みすず書房、2004)において「科学研究の営みが軍事を含む大きな政治の枠内におかれている状況下では、あるいは生命科学が人間の尊厳を損ないかねないところまできている現在、研究活動にはきわめて厳格な倫理が要求されているのであり、研究をすすめる業績をあげることだけが唯一絶対の価値では最早ない。研究者が流れに抗して真に主体性を回復できるとするならば、それは科学のおかれている状況を批判的に捉えなおし、場合によっては実際に研究を拒否する覚悟を持つことによってでしかないのである。」(312頁)とのべているが、『ゴジラ』(1954)の芹澤博士は、空想科学映画のなかであるとはいえ、それを実際にやってのけたのである。

これまで自分が人生をかけてやってきた研究を廃棄することが、当人にとってどれほど無念なことだったかを、想像することはそれほど難しいことではないだろう。それはおそらく芹澤博士が、考え抜いた上での自らの責任の取り方ではなかったのではないだろうか。仮に佐藤のいうようにオキシジェン・デストロイヤーの設計図を焼却せず、大量に生産することになったとしたら、それはあらたな水爆となって人類の脅威になっていたというだけではないのか。実際、このときのオキシジェン・デストロイヤーの使用がもとで後にデストロイヤーという怪獣もあらわれたではないか。ここにおいて問題はふたたび循環するのである。

佐藤がいうように科学者、芹澤大助は、無責任なのではない。むしろ、「何があっても科学研究を進めることは、善である。」というような戦後民主主義の科学観のなかにある科学研究至上主義を批判的にとらえている(おそらくこの科学観は、監督の本多猪四郎の科学観を反映している)という点で市民科学者の思想を先駆的に先取りしている側面があるのである。実際にこうした科学研究至上主義が問題にされ始めるのは、1968年の東大全共闘運動あたりからであり、大衆向けの娯楽空想科学映画とはいえ、それは、それから15年近く前の『ゴジラ』(1954)において問題にされていたのである。それこそが、『ゴジラ』(1954)が、

市民科学にとって特筆されるべき作品であること理由なのである。

## おわりに

夜の中を歩みとおすとき頼りになるのは、橋でも翼でもなく友の足音だ。

これは、第一次世界大戦下の1916年末、24歳のヴァルター・ベンヤミンが、ギムナジウム時代の友人ヘルベルト・ベルモーレにあてて書いた言葉だ。

ベンヤミンは、当時の権威に抗して青年の新たな文化を創出しようとする青年運動に参加し、1914年にはベルリンで「自由学生連合」に所属し、論文や講演などの活動に従事していた。

第一次大戦開始に際して人々が、ナショナリズムに熱狂して参戦していく中でこの運動の限界を知り孤独を深めていった。

ベンヤミンは、かつての師グスタフ・ヴァイネケンに「あなたはあなたからすべてを奪った国家に、青年たちまでを犠牲に捧げたのです。かれらは、今後いいようもない苦しみをなめるでしょう」と決別の手紙を書き送っていた。

私は、このベンヤミンの言葉を野村修『ベンヤミンの生涯』(平凡社 1977)ではじめて知ったのだが、この本の表紙には、野村修の次の言葉が記されている。

<夜の中を歩みとおすとき助けになるものは、橋でも翼でもなくて友の足音だ。>

というベンヤミンのことばが、ぼくは好きだ。しかし先を行っただれかのとだえた足音が、ぼくらの耳につきとおってくることもあるだろう。この本は、そのようなひとつ足音をぼくなり捉えようとした、ひとつの試みである。

ドイツ文学者、三宅晶子氏によれば、ここで友の足音と訳されているのは、原文のドイツ語は *bruderliche Schritt* と表記するという。直訳すると「友愛的な歩み」となるが、これをドイツ文学者の野村修氏は、「友の足音」と意識していたのだ。同じくドイツ文学者の三宅晶子氏は、「視覚的にも聴覚的にもくっきりとした情景を浮かび上がらせ、読む者の心に鮮やかな印象を残す。野村修氏自身が、ベンヤミンの足音をこのように聴いたのだろう。」と書きそれに続けて「夜に抗して歩む抵抗者たちの足音を、過去にそして現在に聞き取っていくことをこの連載のテーマにしたいと思う。」と述べていた。

私は、いつのころからか『ゴジラ』(1954)を見ながらこのベンヤミンの言葉「夜の中を歩みとおすとき頼りになるのは、橋でも翼でもなく友の足音だ。」を想起している自分に気が付いていた。『ゴジラ』(1954)の冒頭部分には、ゴジラの足音が鳴り響いたあとにゴジラの

咆哮が、響き渡るのだが、そのゴジラの足音を「友の足音」として聞きとっている自分にある。

ベンヤミンは、さきほどの一文で続けてこう書いていた。

夜に抗して闘う者は、夜の最も深い闇を動かして、夜そのものの光を現出させねばならない。

夜の闇に外から光を当てるのではない。その中で生き、抗して闘っている夜の「最も底深い闇」を自ら動かして「夜そのものの光を現出させる」というのだ。

三宅晶子氏はこのベンヤミンの言葉に関して

「ベンヤミンが歩んだ夜はいま私たちが歩もうとしている夜に通じている。この夜に外から啓蒙の光を当てるのではなく、その夜の底に深く分け入ること、そしてそこにはらまれている光を探り当て、夜を分解し、その内実をあらわにすること—私にとってそれは私自身の不安と弱さを通してこの時代の底にある沈黙に降りていくことであり、過去の夜と同時代の夜が通底する場所でこの夜の構造を見極め、その底にある人々の沈黙と苦しみと憎しみとあきらめの深さを探っていくことに他ならない。」(183頁)「9・11の廃墟からベンヤミンを読む」『前夜』(創刊号,2005)と述べている。

私は、この三宅氏の言葉を読んで「ますますこれはゴジラだ。」と思うようになった。

ゴジラは、夜のなかにあって夜の最も深い闇を動かし、内部にある夜そのものの光を現出させるそのような稀な怪獣なのだ。ゴジラのあの背びれの光は、本多猪四郎によって着想されたアイデアだが、夜そのものの光を現しているという意味で秀逸なアイデアであった。

また、ゴジラの足音はもちろん人工的に作りだされた音である。作りだしたのは録音技師の三縄一郎であった。戦争映画の爆音にエコーをかけて処理したのが、ゴジラの足音だという。そして三縄一郎もまた1939年から1942年にかけて中国大陸に日本兵士として動員された一人であった。

ゴジラの足音を友の足音として聞き取ること、そしてゴジラとともに夜の最も深い闇を動かし、夜そのものの光を現出させること、それこそが「戦争前夜を解放前夜とするまれな望みをすてない」(徐京植)市民科学者の課題なのではないかと私は考えている。

市民科学研究室の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文を興味深いと感じていただければ、ぜひ以下のサイトからワンコイン(100円)でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる—そんな営みの一歩だと思っていいただければありがたいです。

[ワンコインカンパ](#) ← [ここをクリック](#) (市民研のpaypal支払いサイトに繋がります)